

シンポジウム 「ビザンティン写本研究の現在」

益田 朋幸

2007年10月に行われたシンポジウムの報告を、ここに掲載する。まず10月13日(土)には早稲田大学戸山キャンパス(文学学術院)36号館681教室において、ビザンティン写本研究の第一人者であるジョン・ラウデン教授(ロンドン大学コートールド美術研究所)の講演が行われた。ラウデン教授来日に際しては、鹿島美術財団の助成を得ることができた。ここに記して感謝いたします。

講演は2本、「おおよけにされたことば、可視化されたことば 初期キリスト教写本装丁板に見られる図像について」と、セミナー「新発見の写本、聖ソフィア大聖堂のためのビザンティン彩飾レクショナリー(1100年頃)について」。ラウデン教授の教え子でもある、明治大学の瀧口美香氏が通訳を務めてくださった。後者の、新発見の写本に関する短い発表については、写本の新所蔵者であるニューヨークのメトロポリタン美術館との契約の都合でここに原稿を掲載できないのが残念であるが、前者の講演原稿全文を以下に採録する。

翌週10月20日(土)には、同じ早稲田大学戸山キャンパス(文学学術院)の39号館美術実習室において、標題のシンポジウムを行った。発表者はいずれも辻成史先生から多くの学恩を得た者である。日本におけるビザンティン写本研究は、辻先生を嚆矢とする。レクショナリーと福音書、美術と典礼の関係、ビザンティン研究における写本の重要性、あるいは具体的にストゥディオス修道院の写本工房問題。5人のパネラーがそれぞれに、辻先生から得た問題意識を発展させた発表を行った。それらを締めくくる形で、辻先生ご本人の提言をいただいたのは我々の幸いとするところである。

ここに“another Tsuji”、辻佐保子先生のお仕事とその影響を加えれば、日本におけるビザンティン美術研究史が描けるだろう。近年、欧米、そしてギリシア本国でも、ビザンティン写本研究者は著しく減少している。極東の島国日本において、ビザンティン写本に限定した高いレベルのシンポジウムが行われることは、一種の奇景と言えるかもしれないが、「両」辻先生ら先学のご尽力の賜物である。

当日は以下の順で発表が行われ、その後活発な討議がかわされた。

辻絵理子(テオドロス詩篇 British Library, Add.19.352)

櫻井夕里子(パルマ福音書 Bibl. Palatina, Parma, Cod.gr.5)

橋川裕之(総主教アタナシオス書簡 Vat.Gr.2219)

瀧口美香(四福音書 British Library, Burney 19)

益田朋幸(レクショナリー写本の聖者暦)

辻成史(福音書写本の祭祀的構造)

これに先立つ8月7日、早稲田大学におけるビザンティン美術研究の基を築かれた名誉教授高橋榮一先生が逝去された。10月29日には早稲田大学において「お別れの会」が催され、遺稿集『ビザンティンへの船出』が刊行された。ここに記して、ご冥福をお祈り申し上げます。